

主 題：弟子の足を洗われたイエス様

聖書箇所：ヨハネの福音書 13章1-17節

テーマ：イエス様に見られる謙遜の模範にならって歩いていく

今朝、皆さんと一緒に学びたいみことばは、普段見ている詩篇でもコロサイでもなく、ヨハネの福音書13章です。おそらく多くの人にとってこの13章から続く場面は、もう何度も読んでよく親しんでおられる箇所の一つかと思います。また特に、きょう私たちが見る“最後の晚餐”とも呼ばれる、イエス様と十二人の弟子たちが食事をしている光景は、たとえ聖書を知らない方であっても、絵画や映画などを通して知っていたりする有名な場面の一つでしょう。きょうはその“最後の晚餐”が描かれている13章、その中でも1-17節を通して、私たちは、弟子の足を洗われたイエス様の姿を、いや、何よりその姿のうちに見られるイエス様の愛と謙遜の模範に、改めて注目してみたいと思います。

皆さんもご存じのとおり、私たちは今、教会全体として「互いに愛し合う」ということを、月のみことばを用いてともに考えています。自分たちが勝手に思いつくような愛とか、この世が教えている愛で互いに愛し合おうとするのではなく、聖書が教えてくれている愛の姿に立ち返って、神様と人に仕えるということ、ともに目指して歩んでいるわけです。そんな私たちにとってこれから見るこの箇所は、言うまでもなく最高の模範を教えてくれています。ですから、大切なみことばと一緒に心を留めてみましょう。そしてぜひ、それぞれが自分自身のこととしていま一度考えてみてください。果たして私は、イエス様の愛や謙遜というものを、正しく知っているのだろうか？もし「知っている」と言うのなら、では、その私が持っている愛や謙遜は、この最高の模範であるイエス様の愛と謙遜に似たものへと、日々変えられ続けているだろうか？と。その問いを頭のうちに置きながら、聖書のことば自体に目を向けてみましょう。

私たちは特に1-17節のみことばのうちに、イエス様のへりくだりの模範に関する三つの要素を見て取ることができます。一つずつ順番に考えてみたいと思います。ぜひ、それぞれきょうのテキストである1節からよく見てください。

ヨハネ13：1-17

「1 さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。：2 夕食の間のことであった。悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イエスを売ろうとする思いを入れていたが、：3 イエスは、父が万物を自分の手に渡されたことと、ご自分が神から出て神に行くことを知られ、：4 夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。：5 それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまとしておられる手ぬぐいで、ふき始められた。：6 こうして、イエスはシモン・ペテロのところに来られた。ペテロはイエスに言った。「主よ。あなたが、私の足を洗ってくださるのですか。」：7 イエスは答えて言われた。「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」：8 ペテロはイエスに言った。「決して私の足をお洗いにならないでください。」イエスは答えられた。「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」：9 シモン・ペテロは言った。「主よ。私の足だけでなく、手も頭も洗ってください。」：10 イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。：11 イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、「みながきよいのではない」と言われたのである。：12 イエスは、彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、彼らに言われた。「わたしがあなたがたに何をしたら、わかりますか。：13 あなた

がたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。:14 それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。:16 まことに、まことに、あなたがたに告げます。しもべはその主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさるものではありません。:17 あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行うときに、あなたがたは祝福されるのです。」

○イエス様に見るへりくだりの模範：三つの要素

1. へりくだりの動機：愛 1節

一つ目の要素は「へりくだりの動機」です。イエス様はどうして弟子たちの足を洗われたのか、その動機がこの1節に述べられていました。もう一度1節を見るとこう書いていました。「さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。」と。イエス様のへりくだりの動機とはいったい何だったのでしょうか？それは「愛」でした。イエス様はご自身の大きな愛のゆえに、喜んで弟子たちに仕えられました。「その愛を残るところなく示された」のです。「愛」が、へりくだりの動機でした。

このイエス様の心をより正しく理解するためには、イエス様が置かれていた背景を覚えている必要があります。少し思い出してください。イエス様が弟子たちと最後の晩餐をともにしていたこの場面、これは、十字架にかかる日の前日、木曜日の晩のことでした。そしてこの時、イエス様はこれから自分の身に起こることを何も知らなかったわけではなかったのです。その逆で、イエス様は明らかに地上での時間が終わりに近づいていることをわかっておられました。1節にも記されていたように、ご自身がこの世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを、この方は知っておられたのです。言い換えると、イエス様はもう少ししたら自分が裏切りにあつて敵の手に捉えられることを、わかっておられました。もう少ししたら自分が十字架にかけられ苦しみ死ぬということも、その十字架にあつて人々の罪を代わりに背負い、神の御怒りを受けて罰せられる、ということもわかっておられ、また墓に葬られた後、三日目によみがえり、天の父のもとに再び戻ることになることもわかっておられたのです。イエス様はそれらすべてのことをわかっておられました。どう思います？そのようにイエス様は自分の身に迫っているものをご存じでした。十字架のさまざまな苦しみや痛みも知っておられました。その苦しみに対して、何も感じておられなかったのでしょうか？いいえ、感じておられました。その苦しみがあまりにも大きすぎるものだったからこそ、食事の後、弟子たちと向かったオリブ山で、イエス様は悲しみに悶えながら祈りをささげ続けておられたのです。その様子はマタイ26章を見ればよくわかりますが、例えば39節や42節にこのように記されていました。「:39 それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください。」42節「イエスは二度目に離れて行き、祈って言われた。「わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください。」」と。もちろん、イエス様は最初から最後まで父なる神様のみこころに忠実に、完全に従われたお方でした。でも、そんなお方にとっても「可能であるなら、この杯を過ぎ去らせてください。」と繰り返し願ったほど、差し迫っていた苦しみは深刻なものだったのです。イエス様にとって、何でもなかったわけではありません。そういった大きな苦痛が目の前にあることをイエス様はよくわかっておられました。

では、そんな大きな苦痛を、そんな十字架を前にして、イエス様がとられた行動はいったい何だったのでしょうか？それは、弟子たちのことに関心を払うことでした。彼らを心から愛することでした。自分のことに心がとらわれてもおかしくないような状況にあつてなお、イエス様は愛を示し続けられたのです。1節をもう一度見てみると、「その愛を残るところなく示された」という表現が出てきていました。

この「残るところなく」ということばには、大きく三つほど意味が考えられています。一つ目は、イエス様は「永遠に」その愛を示された、という時間的な意味です。二つ目は、イエス様は「地上での生涯の終わりまで」その愛を示された、というこれも時間的な意味です。イエス様は地上におられたその最後の最後に至るまで弟子たちのことを愛されたと。そして三つ目は、イエス様は「完全に」「限度いっぱい」「最大限」にその愛を示された、という程度の意味です。多くの聖書註解者たちは、最後三つ目の意味でこのことばを捉えています。主はご自分の弟子たちのことを、完全に最高の全き愛でもって愛されたのだと。おそらくこの箇所では、この意味で考えるのが一番ふさわしいでしょう。でも、いずれにせよポイントは同じでした。イエス様が示されていたご自分の者たちに対する愛、それは、一切の限界はなく、周りの状況に左右されることもなく、いつまでも続く、最高で、一方的な、完全な愛でした。その愛を示されていたイエス様。でも、まちががなくイエス様は自分のことに心がとらわれてもおかしくない状況に置かれていたのです。私たちには想像することもできないほどの困難や試練を目前にしておられたイエス様は、問題だらけで一向に変わらないそんな弱い弟子たちを横に置き、その者たちを見捨ててしまって、自分の大きな苦しみと心をとられる選択をしていてもおかしくはないほどのものを持っておられたことを、私たちは忘れてはいけません。でも、それでもなお、イエス様の目は十字架の苦しみにとらわれてはいなかったのです。世の罪を背負うことの不満を口にしていただけでもなければ、なぜ、罪のないわたしがこの人たちの代わりに神の御怒りを受けて罰せられなければいけないのだと、憤っていたのでもありませんでした。イエス様はただ愛するご自身の弟子に目を向けて、彼らに深い愛情を絶えず示しておられたのです。変わらない忍耐を持って、変わらないあわれみを持って彼らに仕えて、彼らのことを最後の最後まで、完全な愛でもって愛され続けておられたのです。それこそがイエス様が持つておられた愛でした。

そして皆さん、私たちが喜べるのは、このイエス様の愛は、昔も今も変わっていないということです。世にいる自分のもの愛されたイエス様のその一方的な愛というのは、今も同じようにイエス・キリストを信じ救われた者にも示し続けられているということです。だからもし、いろんな試練や苦しみに直面して、大きな失意や悲しみを抱くことがあるなら、罪との激しい戦いを経験して、罪悪感や後悔に心がさいなまれることがあるなら、このみことばを思い出してください。みことばの真理に心を留めてください。神の子どもとされたあなたを、イエス様は変わらず愛してくださっているということです。この方の愛というのは、私たちのものとは違います。私たちはいろんなものに心がとらわれて、「今こっちに集中しているから、そっちのものには気を配れない」というように、私たちの愛は引き裂かれることがあるのです。でもこの方の愛は、私たちには想像することもできない苦しみを目の前にしてなお、一方的に変わらず示されたものでした。この方のいつまでも変わることもない完全な、この最高の愛から私たちを引き離すことができるものは何一つとしてないのだとみことばは教えています。先週も見ましたが、ローマ 8 : 38 - 39 でこう言われていました。「:38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、:39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」と。神様の愛は、この世の愛とは違います。だからこそ、決してごちゃ混ぜにはしてはいけません。キリストにある、ご自分のものに対する神様の愛は、感情に流されていくようなものでも、周りの状況に左右されるものでもないのです。この愛は何よりも、神様の変わらないご性質に基づいているのです。きのうも、きょうも、あしたも決して変わることもないそのご性質に基づいてある愛だからこそ、私たちはいつもそこに愛を見出すことができます。イエス様はそんな完全な愛をご自分の弟子たちに残るところなく示されました。それが、私たちが 13 : 1 を見るときに覚えることができるのです。13章以降もそうです。ここに記されているすべてのイエス様のことばも行動も、そのすべての動機は愛だった、ということです。

2. へりくだりの模範 2-11節

そんな愛を持った、動機に突き動かされたイエス様は、ただことばだけではなくて、実際に弟子たちに仕えておられました。今度は二つ目の要素を2節から見てみましょう。二つ目の要素は「へりくだりの模範」です。イエス様はことばだけ、口だけではありませんでした。実際に模範を示されたのです。そのことを2-11節に見て取ることができます。まず2-5節はこのように続いていました。「:2 夕食の間のことであった。悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イエスを売ろうとする思いを入れていたが、:3 イエスは、父が万物を自分の手に渡されたことと、ご自分が神から出て神に行くことを知られ、:4 夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。:5 それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまとおられる手ぬぐいで、ふき始められた。」弟子たちに完全な愛を示そうとされたイエス様がとられた行動、それは、彼らの足を洗うことでした。でも、私たちはこの行動を見たときに思うかもしれません。いったいこの行為のどこが最高の愛なのか？いったいどの部分がへりくだったものなのか？と。みことばをよく見てください。とてつもなく重要なことが少なくともこの箇所二つ見て取れました。

まず、2節にこうありましたね。「夕食の間のことであった。悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イエスを売ろうとする思いを入れていたが、」と。重要なこと一つ目、それは「イエス様が夕食の席にあって愛を示そうとされていた時、そこにいたすべてのものが従順にイエス様に従っていたのではなかった」ということです。そこには、主に大きな憎しみを抱く存在が紛れ込んでいました。一見ほかの弟子たちと同じようにふるまって、同じように食事をともにしていながら、その心は裏切る思いでいっぱいにあふれた存在がいたのです。それは、イスカリオテのユダでした。聖書は、この最後の晩餐に至る前、彼が祭司長たちのもとを訪れて、イエス様を売り渡す計画を立てていたことをはっきりと教えています。マタイ26:14-16にこのように記されていたのです。「:14 そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテ・ユダという者が、祭司長たちのところへ行って、:15 こう言った。「彼をあなたがたに売るとしたら、いったいいくらくれますか。」すると、彼らは銀貨三十枚を彼に支払った。:16 そのときから、彼はイエスを引き渡す機会をねらっていた。」だれかに言われたから、だれかに強制されたからではありません。ユダは自分の意志でもってイエス様を裏切り、イエス様を引き渡す機会を求め続けました。邪悪な計画を心に持った者が食卓の席に紛れ込んでいたのです。驚くべきは、イエス様はこのことをすべてご存じでした。13章の続きの10-11節にもこう記されています。「:10 イエスは彼に言われた。

「:10…あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。」:11 イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、「みながきよいのではない」と言われたのである。」イエス様は食卓に紛れ込んでいた邪悪な心を持つ者を知らなかったのではありません。だれが裏切るのかを知らなかったのではありません。だれが裏切るのか、だれが自分を売り渡そうとしているのかをはっきりとわかっておられたのです。それでいてなお、イエス様はそのユダの足をも洗われました。少し自分のこととして考えてみてください。例えば私たちが、自分をひどく裏切って自分にひどい痛みや苦しみを与えようとする者を事前に知っていたとしたら、私たちはその者の足を洗うことができるでしょうか？仮にできたとしても、痛めつけてやるつもりで思いっきり力を込めて洗おうとするかもしれませんし、見ていないうちに、その水を熱湯とすり替えようとする人もいるかもしれません。私たちは、自分を傷つけようとする者に対して、愛を示す必要なんてないと思うかもしれません。でも、イエス様は違いました。イエス様はそんなユダの足さえも、みずから洗われたのです。たった銀貨三十枚のために自分を裏切ろうとした者にさえ、最後の愛を示されました。本来それに値しない者に対して喜んで仕えるその姿、それこそイエス様が明らかにされたへりくだりの模範でした。

でも、それだけではありません。これだけでもすごいと思いますが、3節にこう書かれていますね。「イエスは、父が万物を自分の手に渡されたことと、ご自分が神から出て神に行くことを知られ、」と。突拍子

もなく出てきたようなことばに思うかもしれませんが、とても大切なことがここに言われていました。重要なことの二つ目、それは「イエスは、ご自分がどんなに偉大な存在かを知っておられた」ということです。それでもなお、この方はご自分の偉大さを横に置いて、へりくだって弟子に仕えられたということです。イエス様はだれが裏切るのかを知っておられただけではありません。イエス様はご自身がどれだけ偉大なお方なのかも知っておられました。イエス様はご自分の手に万物が渡されて、すべてを支配する権威を持っているということを知っておられました。またこの方はご自分が地上を離れて、これからもといた天に戻っていくということも知っておられました。まとめれば、イエス様は、ご自身がすべてのものの主権者であって、永遠の初めから永遠の神様であることを覚えておられたのです。イエス様はご自身がだれなのかわかっておられました。でもその中であってなお、愛にあふれたイエス様は、夕食の席から立ち上がり、上着を脱いで、手ぬぐいをとって腰にまとい、たらいに水を入れて、そして弟子たちの汚れた足を洗ったということです。

ご存じの方もいると思いますが、この当時、人々は裸足にサンダルのようなものを履いて道を歩いていました。容易に想像できるように、もちろんその道は、今のようなコンクリートで舗装されていたものではありません。砂埃がいつも舞い上がっていて、あちこちに泥だまりがあったり、加えていろんな動物の死骸や糞がそこら中に落ちていました。汚かったわけです。そんな道を歩いていたのです。だから、だれかの家を訪問するときに最初に人々が受けたもてなしは、道中でひどく汚れたその足を玄関のところで洗ってもらうことでした。それが最初のもてなしだったのです。家の主人は、その時、奴隷を用いて足を洗わせていました。それがもてなしでした。でも同時に、この足を洗うという行為はあまりにも汚れていて醜い行為だとされていたので、奴隷は奴隷でも、ユダヤ人の奴隷にはそれが免除されていたりもしました。その代り、そんな汚い軽蔑される、だれもしたくないそのような行為は、奴隷の中でも最下層の奴隷、異邦人の奴隷が主に課されていたものだったのです。だれかの足を洗うというのは、それだけ忌み嫌われていた、最低の奴隷が成す仕事でした。

そして皆さん、この背景を頭に入れた上で、イエス様と弟子たちの食事の場面を思い浮かべてみてください。13章を読んでいて気付かれたと思いますが、ここには、食事の前に弟子たちが足を洗ったといった描写は一切出てきていません。つまり彼らは、汚れた足のままで部屋に入っていったということです。まちがいでなく彼らは、そこに用意されていた水やたらい、またタオルなどを目にしていたことでしょう。そして思っていたことでしょう。いったい自分たちの足を洗う奴隷はどこにいるのだろうか？いないじゃないか…と。少し怪訝な表情を浮かべながら、彼らは食事の席に着いたことでしょう。奴隷はいないから私が主であるイエス様の足を洗わせていただく、ほかの弟子たちの足も洗ってあげよう、などと考えていた者はだれひとりいませんでした。いやむしろ、彼らはこの食事の場に来るまでも、また来てからもずっと、ある話で持ちきりでした。彼らは、だれが一番偉いのかという争いをずっとしていたのです。同じくこの最後の晩餐のシーンが書かれているルカ22章でルカはこのように記していました。24節「また、彼らの間には、この中でだれが一番偉いだろうかという論議も起こった。」と。よく考えてみてください。イエス様は想像することもできない苦しみを前にして、それでいてなお弟子たちのことに心を留め、彼らを愛そうとされていました。当の本人の弟子たちは、自分たちの目の前に置かれている水を見ても何も思わず、ただ、だれが自分に仕えてくれるのかということに心がとらわれ続けていたのです。彼らの関心はいつもずっと自分のことでした。そのような中でイエス様は立ち上がって、ひとりひとりの足を洗われたのです。彼らはどれほどこの光景に衝撃を受けたことでしょう。目の前で行われている事は、彼らにとってどんなに信じられないものだったことでしょう。人間の奴隷の間ですら軽蔑されるような、最も身分の低い奴隷に課せられる足を洗うという行為。それをイエス様がみずから進んでなされていました。すべての主であり神の御子であるそのお方が、まさにへりくだって、仕えるしもべとなられたのです。かつて、イエス様はこのように言われていました。マルコ10：45「人の

子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」イエス様が来られた目的は、仕えられるためではなくて、かえって仕えるためであったと。そのとおりにイエス様は歩まれていました。パウロもイエス様の謙遜に関してこのように教えていました。ピリピ2：6－8「：6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、：7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、：8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」まさにこの方は、その誕生においても、その生涯においても、また何よりもあの十字架においても、すべてにおいてへりくだりを、謙遜を実践したお方でした。本来であれば、ご自分こそほめたたえられてしかるべきお方でした。この方は神の御姿である方だったのです。そんな偉大な王にもかかわらず、喜んで奴隷として人々に仕える選択をなさいました。それが、イエス様の示された模範だったのです。

立ち止まって少し考えてみましょう。果たして私たち自身は、普段どのようにして人々に仕えようとしているのでしょうか？また時に「私にはもっと優れたものが値する」と高ぶって、へりくだって仕えることを拒んでいるかもしれません。だれもやりたくないようなものを見れば、「私もしたくない、私ではなくてほかの人がやってくればそれでいい」と、やらない理由探しに没頭しているかもしれません。自分のものに心がとらわれて、自分はだれかに率先して仕えることよりも、だれかが自分に仕えてくれることをひたすら待ち続けているかもしれません。でももしそうなら、イエス様がどんな模範を示されたのかを思い出すことです。イエス様はご自分がすべての主権者であって、永遠の神様であるということを知っていてなお、最も低いものとなられました。この世界のすべてを造った創造主であるお方が、思いのままにすべてを支配されている統治者であるお方が、すべてのものにまさる第一の方であるそのお方が、みずから奴隷のかたちをとって弟子の汚れた足を洗われたのです。まさにイエス様はご自分に値する権利や特権を喜んで横に置いて仕えたお方でした。そうだとすると、このように本来仕えられるべきお方が仕えることを選択し喜ばれたのなら、本来仕えるべき私たちはいったいどのように歩むべきなのでしょう？イエス様が横に置いたものと、私たちがとらわれているものを比べて、「これは横にはおけない」というものを果たして私たちは持っているのでしょうか？私たちも主の模範に倣うことです。まず、何が自分に値するのかわくのではなく、何が神様に喜ばれて人々の益のためになるのかに心を留め続けることです。イエス様はもうすでにそんな模範を私たちに示してくださいました。そんな模範があったから、今私たちは救われて、歩むことができているのです。

さて、イエス様は信じられないような模範を弟子たちの目の前で示されました。まちがいなく弟子たちはみんな大きな衝撃を受けたでしょう。その場が静寂であったことは容易に想像できます。でも、その中でもペテロは特にびっくりしていたでしょう。だからいつものように、思ったことがそのまま口から飛び出してきました。ほかの弟子の足を洗っていたイエス様が自分のところに来られた時、彼は抑えきれずに言ったのです。6節「主よ。あなたが、私の足を洗ってくださるのですか。」と。彼は自分の目に映っている光景が信じられませんでした。主の主であるお方が、自分の汚い足を洗うことなんて、彼にとっては到底受け入れられるものではなかったのです。だから、彼はどうにかしてその行為を妨げようとしてしました。それに対してイエス様は答えられたわけです。7節「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」と。「ペテロ、あなたには今、何が起きているのか理解できないでしょう。でも、あとになって時が来ればわかるようになります。だから、今はわたしがあなたにしようとすることをそのまま受け入れなさい。」と。当然、ペテロはこのイエス様のことばを素直に信じるべきでした。「たとえ自分にはわからなかったとしても、主がしておられることを信頼して受け入れよう」と。でも彼がとった行動は何でした？イエス様の返答を聞いたペテロは、はっきりと8節で言っていましたね。「決して私の足をお洗いにならないでください。」と。ここで彼は単に「お洗いにならないでください」と言っていない。「決して」という二重に否定することばを加えて

いたのです。要するに彼は、「絶対に、決して、この先何があったとしても自分の足は洗わないでください。」とそう強調していたのです。ところが、そんなペテロに対してイエス様はこのように答えられました。8節の続きにこう書いていますね。「イエスは答えられた。「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」」いったいイエス様はここで何を言わんとされたのでしょうか？簡潔にいうと、ある事実をペテロに突きつけようとされました。イエス様は教えておられたのです。「ペテロ、もしあなたが足を洗うというわたしのこのへりくだった行為を拒絶するというのであれば、あなたはこれからわたしが十字架で成し遂げようとするそのへりくだった行為をも受け入れることはできません。足の汚れを洗い流すといったそんな小さなへりくだりのみわざを素直に受け入れることがないのであれば、あなたは絶対に罪の汚れを洗い流そうとする大きなへりくだりのみわざを信じ受け入れることはできないのです。」と。イエス・キリストの十字架のみわざ、それはまさに完全な謙遜の愛の現れでした。この十字架の死を通して、罪はすべて洗い流され、聖められるのです。もちろんそんなキリストの偉大なみわざを受け入れるということは、ペテロだけではなくて、今を生きている私たちにとっても大切なことでした。罪に汚れた私たち自身もみな、キリストによって洗い流される必要があったのです。私たちは、自分の力で罪の問題をどうすることもできませんでした。このイエス・キリストのほかには救われる方法は何一つとして私たちには与えられていませんでした。そしてもし、そんなへりくだりの十字架のみわざをみずから拒むというのであれば、だれであれイエス様と関係を持つことはできないというわけです。罪からの救いも、赦しも、そこにはないということです。ペテロはイエス様の意図に気づいていませんでした。高慢になっていた彼は、主の恵みを素直に受け入れようとしなかったのです。

しかしイエス様のこのことばを耳にしたペテロは急激に立場を変えました。9節「シモン・ペテロは言った。「主よ。私の足だけでなく、手も頭も洗ってください。」」まさにペテロの反応ですね。さっきまで「足を洗わないでください。」と言っていた彼が今度は「全部洗ってください。」と願っていました。ペテロはイエス様と離れたくなかったのです。イエス様と一緒にいるということが洗うことを必要とするのであれば、「では、すべて洗ってください。」と言ったのです。それに対してイエス様はこのように答えられました。10節に「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。」と。何が言われていたのでしょうか。イエス様はここでも救いについて語っておられました。十字架でのイエス様のその一度の死を通して救われた者たちは、確かにその罪をすべて赦されました。義とされたわけです。一度水浴した者、一度救われた者というのは、再びからだ全身を洗いなおす必要はもうなくなった、というわけです。一度救われたら、もうすべての罪は赦されました。でも同時に、そのようにして救われた者たちも罪を全く犯さなくなるわけではありません。水浴した者も外を歩けば足が汚れてしまうように、すでに救われた者たちも悪にあふれたこの世を生きていれば、自分のうちにある罪と日々葛藤していれば、罪に汚れてしまうことがあるのです。だから救われた者も、絶えず足を洗う必要がありました。きよめられ続ける必要がありました。言い換えると、確かに罪の赦しは成し遂げられているけれども、でも、救われた者たちも主の前に罪を犯したのであれば、その罪をすべて認めて、主の前に心から悔い改めて、主の赦しを得ながら続けて歩んでいこうとするのです。それが信仰者の生き方でした。罪を赦されたことを感謝しながら、そのことを喜びながら、同時に日々罪から離れて、聖い者として歩んでいこうとするわけです。「手も頭もからだもすべて洗ってください。」と言って願ったペテロに対して、イエス様は「それは必要ないよ。」と言われていました。「もう水浴している、もう救われているあなたには、それは必要ない。もうきよくされているあなたには、全身を洗う必要はない。」と励まされていたのです。そのようにして救いの確証をも与えておられました。このように私たちがペテロとイエス様のやりとりを見ていくと、確かにペテロのうちには弱さも頑さも多々ありました。へりくだりを拒むといったこともあったのです。でもそんな

な彼の足をも、イエス様はへりくだって洗われました。イエス様は変わらず、最後まで完全な愛を示しておられたのです。これがイエス様の示されたへりくだりの模範でした。

3. へりくだりの命令 12-17節

そして最後に三つ目の様子が12-17節に記されていました。完全な愛を動機としてすばらしい模範を示されてきたイエス様は、三つ目に「へりくだりの命令」を弟子たちに与えていました。12節からこう続いています。よく見てください。「:12 イエスは、彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、彼らに言われた。「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。:13 あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。:14 それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。:16 まことに、まことに、あなたがたに告げます。しもべはその主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさるものではありません。」」イエス様はすばらしい模範を示されていました。でも、その模範は、ただの模範で終わるのではなかったのです。イエス様は、イエス様ご自身の模範を目にした弟子たちが、イエス様がなされていたそれと同じかたちで、それに倣って生きていくということを求めておられました。だれが一番偉いのかを絶えず争っていたそんな彼らが、互いの間でへりくだって、イエス様が天に上った後残される地上にあって、互いに足を洗い合いながら、互いに仕え合っていくことを命じておられたのです。

そして、これは今の私たちも同じです。私たちも自分勝手な思い込みによって描く姿ではなくて、イエス様の残された模範に倣って、いつも愛を動機として、互いにへりくだって仕え合っていくことが求められていました。立ち止まって自分の歩みを少し振り返ってみてください。果たして私たちはイエス様の模範にならって、互いに今、仕え合おうとしているのでしょうか？私たちのことばや私たちの行動のすべては、愛を動機にしたものでしょうか？イエス様があのユダに対してへりくだって仕えておられたように、私たちはどんな人に対しても喜んで仕えようとしているのでしょうか？どうでしょう？私たちは、自分自身が仕えられることにとらわれ続けていないのでしょうか？それとも、神様や人にみずから仕えることに心がとらわれているのでしょうか？

確実に言えることは、私たちが互いの間でイエス様のように仕え合って愛し合おうとしていくなら、私たちは“自分”というものを捨てなくてはならない、ということです。もしある人のうちに「私は周りから仕えられるべきだ」というプライドがあるのなら、それらを捨ててしまわなくてははいけません。もしある人のうちに「私は自分だけでやっていける、私はだれの助けもいらない」と仕えられることを拒む思いがあるのなら、その高慢さも捨ててしまわなくてははいけません。もしある人のうちに「私ではなくて、だれかほかの人がやればいいんだ」という自分勝手さがあるのなら、それも捨ててしまわないといけません。結局のところ、それがどんなものであろうと同じです。もし私たちのうちに、だれかのために喜んで自分の身をささげることを妨げるものがあるのなら、キリストのような愛で愛することを妨げるものがあるのなら、私たちが互いに仕え合うことを実践していくのを妨げるものがあるのなら、それらはすべて死ななければならない、ということです。もちろん、私たちがそんな愛を実践しようとするときに難しさを覚えることはあるでしょう。どんなときも、だれに対してであっても、みずからへりくだるということを実践しようとするときに抵抗を覚えることもあるでしょう。でも、そのときには立ち止まって思い出してください。どんな模範を主が示してくださったのかということ。神の御子であるイエス・キリストは、人となってこの世に来られただけではありません。みずから進んで人に仕える奴隷となられました。本来であればこの方こそすべての人から仕えられるべき偉大な王であるのに、主の主であるのに、でも、ご自身の大きな愛のゆえに罪人にへりくだって仕えて、最後には十字架にまでかかって死なれたのです。私たちが受けるべき神様の御怒りの杯を、この方は代わりに飲み干してく

ださいました。こうして神のひとり子が、ほかのだれでもない私やあなたの罪のために刺し通され、だれも経験したことのない想像を絶するほどの痛みと苦しみを味わわれたのです。でも、そのようにしてイエス様がへりくだって来てくださったからこそ、へりくだって十字架にかかってくくださったからこそ、私たちはそのへりくだりの愛のゆえに、この方を信じる信仰によって救われ、恵みのゆえに生かされているのです。今が私たちにあるのは、この方のそのへりくだりの愛のゆえです。だからその犠牲を忘れないことです。そして忘れないで、自分自身に問いかけてください。仕えられるべき最高のお方が、仕えることを喜びとされました。仕えることをみずから選択されました。そうだとするならば、果たして仕えるべきしもべである私たちはどのように歩むべきなのでしょう？イエス様の模範に倣うことです。互いに仕え合ってください。

そして最後に、イエス様は弟子たちにこう言っておられましたね。13：17で「あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行うときに、あなたがたは祝福されるのです。」と。何が言われていたのでしょうか？非常にシンプルでした。「もし弟子たちがイエス様の模範を知っていて、それに倣って互いに仕え合うことを行うならば、そのとき、彼らは大いに祝福される。」ということでした。ここで皆さんに気づいてほしいのは、イエス様は、あなたがだれかによって仕えられたら祝福されるとか、あなたが自分の欲するものを手にしたら祝福されるとか、あなたが一番偉い存在になったら祝福されるなど、そんなことは一切言っておられなかったということです。そうではなくて、イエス様の示された模範を知って、それを互いの間で行うならば、そのとき、神様の大きな祝福がその者のうちに与えられるということです。そうだとすると、皆さん、私たちはますます主の模範に倣って歩んでいきたいと思いませんか？私たちが従順に神様と人に仕えていくなれば、そこには確かに難しさはあるけれども、でも、その歩みをほかのだれでもない神様が喜んでいてくださるというわけです。「それを行うならば、そこに祝福があるのだ。」と言われていました。そのような者として生きていくことです。

私たちはきょう、ヨハネの福音書13章を通して、ここにイエス様が示してくださった愛とへりくだりの最高の模範を見ました。私たちを愛してくださったそのすばらしいお方の模範に倣っていきましょう。ますますキリストに似た者となるように、ともに励まし合いながら歩んでいきましょう。